

資料紹介
丹波国山国莊井戸村江口家の木印について

Introduction of Historical Material
The Wood Mark of EGUCHI Family in the IDO Village of YAMAGUNI-no-Sho
of TANBA Country

蘭 部 寿 樹
Toshiki Sonobe

山形県立米沢女子短期大学

『生活文化研究所報告』

第45号 抜刷

2018年3月

資料紹介

丹波国山国莊井戸村江口家の木印について

蘭
部
寿
樹

木印（きじるし）とは本来、木材などに鉋や鉋などで一定の刻みをつけ、これを所有権の表示とするものである（1）。ところが丹波国山国莊（現京都府現京都市右京区京北地域）の木印では、中近世移行期に鉋などによる刻印から焼き印に変わっていった（2）。

二〇一七年八月、恒例の中央大学山国莊調査団現地調査に参加した。その折に、右京区京北井戸町（山国莊井戸村の故地）の江口家ご当主の江口喜代志氏からお借りした「こっくい」を見せてもらった（写真1）。

こっくいの印面部分は、縦三二ミリ・横二〇ミリであった。喜代志氏からの聞き取りによると、間伐する際に木の根元にヨキ（斧の別称）で傷面をつくり、こっくいの印面に墨をつけて木の傷面に印を付けたという。写真1にも墨壺が写っている。

喜代志氏の記憶では、三〇年ぐらい前までこっくいを使っていたそうだ。また喜代志氏は、こっくいとは「こくいん」のことではないかと推測している（ただ、こくいんが刻印か黒印かは定かではない）。

一七二〇（享保五）年八月灰屋村山論訴状写（上黒田春日神社文書二〇号、『丹波国黒田村史料』一九頁）に「雑木二三ヶ村之木と極印を打」という記述がある（柳澤誠氏のご教示による）。また極印（ごくいん・こくいん）には刻印と同じ意味があり、極印・刻印ともに「こくい」



写真1：こっくい（熱田順氏撮影）

や「こつくい」などの転訛がある（『日本国語大辞典』第二版の極印と刻印の項）。

一方、一九六一年発行の同志社大学人文科学研究所が作成した江口家の文書目録には次のような記載がある。

天正二年三月（中略）（江口）右近の略押は大阪市の市章の縦線をはずしたようなサインで、現在でもこの記号は江口氏の材木に記され、焼印されているとのことである（3）。

この記載の略押の件については後述するとして、一九六一年までは木印を焼き印にして使っていたことが判明する。

ただ写真1にみるように、こつくいは印面こそ金属であるが、持ち手は木で出来ている。これでは焼き印として使えないだろう（柳澤氏のご教示による）。この点からみて、一九六一年に使われていた焼き印がある時点で摩耗するなどして使用できなくなった。そしてそれに替えて、墨で木印をつけるこつくいが制作されたと推測する。

次に、この目録記載にある「天正二年三月（中略）（江口）右近の略押」についてみてみよう（写真2）。写真2は、一五七四（天正二）年三月山国莊井戸村江口右近畠地讓状の冒頭部分と署判部分を、畠地書き上げ部分を中略して接合したものである。この江口右近の「大阪市の市章の縦線をはずしたようなサイン」が、問題なのである。

私は以前、このような署判を木印署判と呼び、材木の筏流しの際に用いられた木印を署判に転用したものではないかと指摘した（前掲注（2）論文）。その際、既にこの江口右近の木印署判も把握していた（前掲注（2）論文の表1一〇六番）。この他にも、江口右近の同様の木印署判がみられる（同論文の表1一〇七番）。

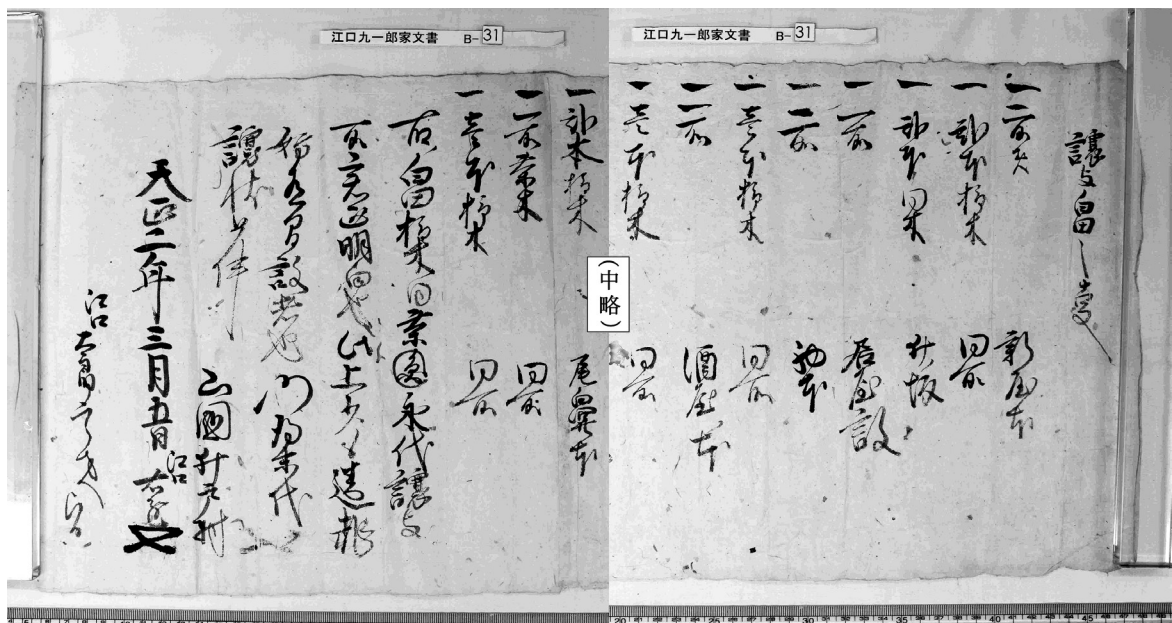


写真2：江口右近の木印署判

そして前述したように、近世になると、この木印は焼き印となる。その際、従来の木印を□や○で囲って焼き印としたものも数多く見られる（元治元年八月後判株取究連印帳、小塩区有文書写真版）。

そこでもう一度、こつくい印の印面部分をクロージアアップしてみよう（写真3）。写真2と写真3を見比べてみる。そうすると、写真3の印面は、写真2の木印署判を□で囲ったものだと思われる。すなわちこつくいは、一六世紀に江口右近が使っていた木印を□で囲んで作成した印面なのである。

残念ながら中世における江口家木印の刻印そのものと現在のこつくいを中継する江口家木印の焼き印は見つかっていない。しかし少なくとも、一六世紀の江口右近が使っていた木印を□で囲ったものを近代の江口家が継承していたことは間違いないだろう。

以上の点から、改めて次の二点が再確認される。

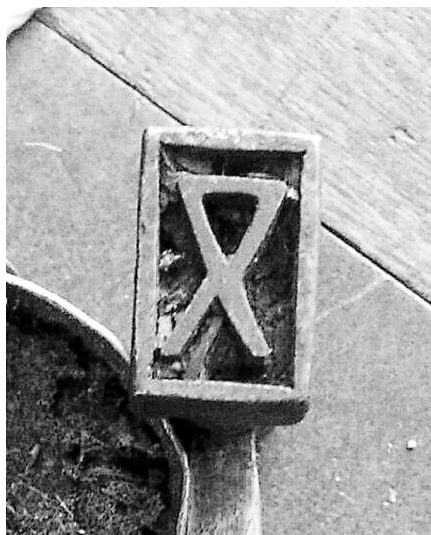


写真3：こつくいの印面
（熱田順氏撮影）

① 近代、江口家が使用していたこつくいの印面が江口右近の木印署判を□で囲ったものであることからみて、一九六一年当時の江口家の焼き印も同じ印面であった可能性が高い。

② このような近代江口家の木印のありかたから類推すると、山国莊江口家の中世の木印署判はやはり中世の木印を転用したものであったと考えられる。

篆書体の複雑な印影（前掲元治元年後判株取究連印帳、小塩区有文書）はやはり焼き印として用いられたのであろう。しかし、木印のような簡易な印影は江戸時代でも木に刻みを付けたり墨付けする刻印として用いられていたことが、前掲の灰屋村山論訴状写から読みとれる。近世の山国莊域では、刻印と焼き印が併用されていたといえよう。今のところ山国莊域における中世の木印刻印そのものや近世の木印焼き印・刻印の物証が全くないだけに、今回の発見の意義は大きい。

また二〇一七年一月一九日、江口喜代志氏から重ねてお話を聞いた。それによると、ご自身が十数年前まで、山の立木を間伐する際に「こつくい」を用いていたという。江口家は「山主」（やまぬし）なので自分では伐採をせず、業者に伐採させる。伐採作業以前に、江口氏が伐採する立木の根本に鉋で切り込みを入れる。その切り込みの白い箇所を墨をつけたこつくいを打ち付け印を付け、伐採する木を指定する。すなわち、こつくいによる印字は、後日、業者の間伐作業が適切におこなわれたかどうかを確認するためのものとして用いられたのである。このような利用法がどれほど遡るものかどうかは明らかではない。

なお春田直紀氏によると、二〇一七年夏、佐藤雄基氏と共に近江国

今堀郷（現滋賀県東近江市）を調査した際、木印に類似する家印の焼き印鋲と刻印鋲とが混在して現存しているとのことであった。これも山国荘と類似する事例であろう。

注

- (1) 桜田勝徳「木印を中心として」（桜田勝徳著作集4、名著出版、一九八一年、初出一九三六年、四五〇頁）。
- (2) 蘭部「丹波国山国荘における木印署判について」（『米沢史学』三二号、二〇一六年）。
- (3) 同志社大学人文科学研究第三研究会編『江口九一郎氏所蔵文書目録』『写真の説明』（同研究会発行、一九六一年、四頁）。

【付記】

今回のこつくい発見を導き、さらにいろいろとコメントをいただいた柳澤誠氏と写真を撮影してくれた熱田順氏に厚く感謝申し上げます。

なお本稿は、二〇一七年度～二〇二〇年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤B「中世・近世在地文書の様式・機能の変遷と中世文書群の構造的変容に関する研究」（研究代表者坂田聡・課題番号17H02390）、ならびに二〇一七年度三菱財団人文科学研究助成金「中世後期～近世前期における百姓のリテラシーに関する研究」（研究代表者坂田聡）による研究成果の一部である。